

町長の一言



ハクビシンの害

正月中のある日、天気が良かったので、町内の山間部にある、道木橋、倉見、住谷の集落を廻ってみました。いずれも、日中は日溜りのある穏やかな山村風景ですが、猪被害防止の防護柵など作っており、庭先まで侵入して来るイノシシ退治に苦勞しているということでした。農家の一人の方は、「イノシシよりハクビシンの方が始末が悪い。木登りは出来るし、隙間があれば防護柵を潜る。りんご栽培を始めて収穫できるようなったら、ハクビシンの害により全滅状態なので全部切り倒してしまっただ」と言い、また庭先のぶどうも切ったようで、その枝先がまだ残っていました。

最近ハクビシンの被害を農家の方から聞くようになりましたが、30年くらい以前には、農作物の被害の話はほとんど無かったように記憶しています。ハクビシンは、元来日本には生息していません。毛皮を取るために放したとか、杉・松の植林後の被害を防止するためにウサギの天敵として野山に放したとの説もあります。丹精を込めて育てたトマト、イチゴ、トウモロコシ、果樹等が、ちょうど収穫時期に失敬されては、憤慨しているだけでは治まらないのではないのでしょうか。つい過激なようですが、深刻な農業被害を与える「害獣」として積極的に駆除を図ってよいのではないかとも思っています。

文芸しるべ

俳句



苗床を均せしのに日に暮れけり 飯田 勇一
枯木山日射して鳥の賑々し 山崎 正行
風音の中の鈍音寒苦 磯 べきよ
初旅や潮目の先は瀬戸の風 今 瀬 多代美
教会の素朴な木椅子寒椿 飯村 昭子
荒き波岩に巻き付く冬の海 森 静江
すつと履く出勤の靴シクラメン 竹内 幸子
影太く残し冬鵲枝移り 鯉 淵 寿美恵
霜を行く息にて眼鏡もりけり 田所 厚子
万両を活け輝ける白き壺 仲田 まちゑ
卵焼ふんわり霜の溶けはじめ 飯村 愛子
実南天短く活けて夜の雨 高橋 芦江
校庭は大き目溜り梅の花 瀬谷 博子
子に因みこつこつ努める初句会 岩下 金司
春らんの浸す寒水一掃すり 田口 勝元

短歌



この年はよき事あれとダルママの
に黒目を入れて平和を願ふ
山形 式妙

転読の声高々と響き合う吉祥
を祈ぐ初春の護摩堂 渡辺 千紗子
サロマ湖に世界のマラソン選手
集ひ百キロを競ふ毎年なりと 秋山 愛子
華やかな衣装羽織りて踊りしは
「磯て名所」ソバラリンピックに 大森 久子
痴呆症の記事の載りたる朝刊
を夫は今日も繰り返し読む 高 堀 よしの

若き日の思ひ出深きわが衣類
師走の空に煙となせり 佐川 あや
全快癒の願ひやまきり月毎に学
ぶ詠歌の恩師に在れば 杉山 みらこ
千葉の地より養豚家の若妻が
今年も訪ひぬリンゴの味を愛で 宮本 ふみ江
柚子浮かぶ燃し風呂に浸り眠つ
むれば清き匂ひは底ひまで沁む 所 美恵子

「かぐや」から撮影して昇る吾が
るる地球は月の面より蒼く浮びぬ 青柳 京子
師走入り黒土破り芽を吹きて
寒さ知らずか路地福寿草 阿良山 ウメノ
燦爛と新春の日は昇り行く皆の
幸福願いつしか 岩下 通子

亡き夫の悲しき暮るこの思ひ百人
一首で心とむる 岩下 美智野
初日の出乾杯音頭とる孫と髪を
なびかせ羽根追うひ孫 仲田 こう
いざされる枯葉が浮かぶホルルの
湯まだある老後仲間と共に 富田 欽子
元日のめでたき朝の玄関にシンピ
ジウムの花芽ふくらむ 鶴田 すが

千ユーリップ早や芽吹きたるきき
らぎや花咲く春の待ち遠しきを
山峡に生れきし霧に視界ゼロ湯
宿は白き闇に包まる 市川 義子
冬至の南瓜夕餉の卓に設ちえて
明日より延びむ日射を待む 片見 和枝
山間の断崖を彩る黄葉紅葉去年
より一期の思ひは深し 川上 千代子
千曲川流るる岸辺草紅葉は波に
たゆとう淡き陽を受け 島 愛子

歳末の商戦ははげしく暮る日々
ポストより重き朝刊取り出す 多田 志保子
薄れ行く記憶の中の夫を見つづ
答なけれどと看りある吾は 坪井 きよ子
木枯らしの近づく気配する今朝は
寒さに負けんと濡れ落ち葉掃く 萩谷 登喜子
南天の枯れ葉落ちてもしつかりと
鮮やかき保ら集団成せり 故・和知 美智子
ひとときを茜に彩りもみじ葉は
二日続きの大霜に散り果てたり 富田 佐智子

焼き餅は正月以外もたまに出る
チヤンピオン男を上げて今スター 青木 新三郎
乾杯の音頭が祝辞よりながい
いくらづでもあるぞと雪は降り積る 山本 隆荘
人込みでそぞろ歩き初詣で 中島 芳春
北野 武

川柳
富田 佐智子